授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 2140 号

Current awareness of palliative care and attitudes toward death in China: a cross-sectional survey

中国における緩和ケアの認知度及び死生観：横断的調査

顔　燕（いぇん　いぇん）

博士（医学）

論文内容の要旨

中国において終末期の患者の QOL を向上させる社会的必要性が高まっているが、依然緩和ケアの普及が進んでいない。理由としては「死」を語るのがタブーという文化が根強く残っていることが考えられる。過去がん患者への社会的・心理的な介入等特定の分野における研究は行われてきたが、中国において緩和ケアの認知度や患者の死生観に関する全国的調査はこれまで行われてこなかった。

本調査は 2018 年 12 月 27 日から 2019 年 1 月 5 日までに中国における 52 のウェブ上の乳がん患者会のメンバーを対象に行ったアンケート調査であり、その設計及び実施は中国人民解放軍総病院第 7 医療センターと順天堂大学大学院緩和医療学研究室とのコラボレーションによるものである。本アンケート調査は中国の患者を対象とし、中国人民解放軍総病院第 7 医療センターの倫理委員会の承認を得ている。主なアウトカムは緩和ケアの認知度、また患者の「死」及び「終末期」の認識に関わるものである。患者の社会的・経済的な状況に関する基礎データを収集し、単変量及び多変量回帰分析を通して緩和ケアの認知度との関連性を分析した。

549 名の回答者から 68 名（12.4%）が「緩和ケア」を聞いたことがあるのが分かった。統計上「教育」または「世代年収」と緩和ケアの認知度との間で有意な関連性が認められた。最期を迎える場所としては、64.7%の回答者が「家で過ごしたい」と答えており、「死」に対しては、49.2%の回答者が「家族や友人をなくすのが怖い」との認識を示した。

中国における初めての緩和ケアの認知度及び死生観のアンケート調査を通して、現在緩和ケアの中国での認知度が極めて低いことが明らかになった。本研究は今後中国では緩和ケアの啓蒙活動が必要とされるエビデンスを示した。特に社会的・経済的に恵まれていない層に力を入れるべきことが示唆された。一方、アンケート調査を通して、がん患者は家族を中心に考える傾向が認められた。中国で緩和ケアを推進する際「家族」という要素が極めて重要であると考えられる。